2026 4.18（土） 開演時間 15:00

アクロス福岡シンフォニーホール
ACROS Fukuoka Symphony Hall

第438回 定期演奏会

The 438th Subscription Concert

「幕開けは満を持して」 太田 弦×九響 英国セレクション

指 揮 Conductor **太田 弦** Gen Ohta ｜ ヴァイオリン Violin **岡本 誠司** Seiji Okamoto ｜ コンサートマスター Concertmaster **扇谷 泰朋** Yasutomo Ogitani

ベンジャミン・ブリテン
Benjamin Britten

ヴァイオリン協奏曲

Violin Concerto in D Minor, Op.15
Ⅰ. Moderato con moto
Ⅱ. Vivace
Ⅲ. Passacaglia: Andante lento

休憩 Intermission

ウィリアム・ウォルトン
William Walton

交響曲 第1番

Symphony No.1
Ⅰ. Allegro assai
Ⅱ. Presto con malizia
Ⅲ. Andante con malinconia
Ⅳ. Maestoso: Allegro brioso ed ardentemente

Talk Event

九響シーズン・プレリュード ― 目からウロコ!?の10周年記念トーク―

時間：14:15－14:45

出演：堀 朋平（住友生命いずみホール音楽アドバイザー）、太田 弦、柿塚 拓真（九響音楽主幹）

シーズン開幕となる本公演直前、舞台上でスペシャル・トークを開催します。
2026年度プログラムの聴きどころを語り尽くす特別イベントです。

主催：（公財）九州交響楽団
後援：福岡県・福岡市
（公財）福岡市文化芸術振興財団
NHK福岡放送局・福岡日英協会
（公財）九州文化協会・福岡文化連盟
九響後援会
助成：福岡県・福岡市・文化庁文化芸術振興費補助金
（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
｜ 独立行政法人日本芸術文化振興会
（公財）アフィニス文化財団
協力：（公財）アクロス福岡

九響交流カフェ〈先着30名／参加費500円〉

1ドリンク&おつまみ・チェキ1枚プレゼント

終演後、ロビー1階ドリンクコーナーにて、九響交流カフェをオープンします。参加申込みは開場後ロビー九響受付にて。お気軽にご参加ください。

Seeing Off

本公演終了後にロビーにて楽団員有志がみなさまをお見送りいたします。わずかな時間ではございますが、お気軽にお声がけください。

特別協賛：

麻生グループ　文化庁　Affinis ÉTIQUETTE

© 勝村祐紀

九州交響楽団首席指揮者
Principal Conductor of the Kyushu Symphony Orchestra

指 揮 Conductor　太田 弦 Gen Ohta

1994年北海道札幌市出身。幼少の頃より、チェロ、ピアノを学ぶ。東京藝術大学音楽学部指揮科を首席で卒業。学内にて安宅賞、同声会賞、若杉弘メモリアル基金賞を受賞。同大学院音楽研究科指揮専攻修士課程を修了。2015年、第17回東京国際音楽コンクール〈指揮〉で2位ならびに聴衆賞を受賞。第30回渡邉曉雄音楽基金音楽賞受賞。2025年、第23回 齋藤秀雄メモリアル基金賞を歴代最年少で受賞。

指揮を尾高忠明、高関健の両氏、作曲を二橋潤一の各氏に師事。山田和樹、パーヴォ・ヤルヴィ各氏などのレッスンを受講する。これまでにNHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、札幌交響楽団、群馬交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団などを指揮、今後さらなる活躍が期待される若手指揮者筆頭。2019年4月から2022年3月まで大阪交響楽団正指揮者を務めた。2023年4月より仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者、2024年4月より九州交響楽団首席指揮者。2026年4月より福岡国際音楽大学客員教授に就任。

2024年7月、同年4月に九州交響楽団首席指揮者就任記念コンサートとして開催した第420回定期演奏会のライブ録音のCDがオクタヴィア・レコードより発売、好評を博している。

Gen Ohta was born in Sapporo, Japan, in 1994. He studied conducting at the Tokyo University of the Arts and graduated with honors. He subsequently completed the Master's Program in Conducting at the university's Graduate School of Music. At the 17th Tokyo International Music Competition for Conducting in 2015, he won second prize as well as the Audience Award. He studied conducting with Tadaaki Otaka and Ken Takaseki, and composition with Junichi Nihashi. In April 2024, he assumed the post of Principal Conductor of the Kyushu Symphony Orchestra. A live CD recording of Shostakovich's Festive Overture and Symphony No. 5, taken from the commemorative 420th Subscription Concert, has been released by Octavia Records, and the partnership between Ohta and the Kyushu Symphony Orchestra has attracted growing attention. Since April 2026, he has also served as Visiting Professor at Fukuoka International University of Music.

©Yuji Ueno

ヴァイオリン　岡本 誠司
Violin　Seiji Okamoto

第19回J.S.バッハ国際コンクールのヴァイオリン部門にてアジア人で初めて優勝。ヴィエニャフスキ国際コンクール第2位、2019年エリザベート王妃国際音楽コンクールでのファイナリスト、2021年にはARDミュンヘン国際音楽コンクールヴァイオリン部門第1位入賞など受賞歴多数の実力派。現在はドイツを拠点に、コンチェルト・ソリストや室内楽など精力的な演奏活動を行いつつ、ハンス・アイスラー音楽大学では後進の指導にも当たっている。反田恭平プロデュースJapan National Orchestraではコンサートマスターを務めている。これまでに、ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団、MDRライプツィヒ放送交響楽団、ウィーン室内管弦楽団、ベルギー国立管弦楽団、サンクトペテルブルグ交響楽団、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団など、国内外のオーケストラとの共演多数。2022年文化庁長官より表彰。第31回出光音楽賞を受賞。

ヴァイオリンはNPO法人イエロー・エンジェルよりM.ゴフリラー（1702年製）の貸与を、日本ヴァイオリンソサエティよりF.ガリアーノ（1777年製）の貸与を受けている。
CD「frei aber einsam ～自由だが孤独に～」をNOVA Recordよりリリース。
公式サイト https://seijiokamoto.net/

Seiji Okamoto is a Berlin-based violinist recognized for major international competition successes. He won First Prize and the Audience Award at the International J. S. Bach Competition in Leipzig (2014), Second Prize at the Wieniawski Competition (2016), was a laureate of the Queen Elisabeth Competition (2019), and received First Prize at the ARD International Music Competition in Munich (2021), along with special prizes. He has appeared as a soloist with leading orchestras across Europe and Japan, is actively engaged in chamber music, and regularly performs with the Japan National Orchestra as concertmaster and soloist. Okamoto currently performs on a 1702 Matteo Goffriller violin generously loaned by the Munetsugu Collection and a 1777 Ferdinando Gagliano violin generously loaned by the Nippon Violin Society.

解説 堀 朋平（音楽美学、九州大学ほか非常勤講師／住友生命いずみホール音楽アドバイザー）

20世紀イギリス音楽は、爽（さわ）やかなだけではありません。エルガーの気高さ、ヴォーン・ウィリアムズの牧歌を越え、その次世代には計り知れぬ闇も追求されました。

解きえぬ内面を音のうちに織り込んだブリテン。人生の節目に書かれたヴァイオリン協奏曲は、自己の内面を映しだす作品です。ひと世代上のウォルトンは、第一次世界大戦の激動期に青春をすごし、前衛に身を投じました。ポピュラーな面持ちをもつ交響曲第1番には、耳をつんざく咆哮（ほうこう）もあります。イギリス音楽の深くて溟（くら）い側面を旅しましょう。

ヴァイオリン協奏曲

ベンジャミン・ブリテン（1913 ― 1976）

この人ほど、詩や倫理をめぐる言葉の世界を音に凝縮させた作曲家は少ない。言葉がない音楽にも、たえず死や暴力の影が漂っている。今年で没後50周年だ。

音楽の才能を伝えてくれた母が病死してまもなく、まるでその代償のように同性愛の指向が明るみになる。23歳のころだ。愛の対象は、指揮者ヘルマン・シェルヒェンの息子ウルフ。9つ下の少年である（2016年に亡くなったことが報道された）。

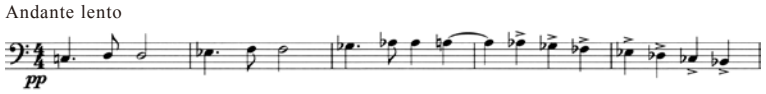
翌年には日記をつけるのをやめた。代わりに音楽が告白のツールになったのだろうか。イギリスを離れてカナダへの大がかりな演奏旅行に出たのが、その少しあと（1939年4月）。道づれは3歳上のテノール歌手、ピーター・ピアーズだ。船出に際して別れたウルフに代わって、この大柄な歌手が生涯の伴侶となることを、25歳のブリテンは予感していただろう。

ヴァイオリン協奏曲が着手されたのは、日記をやめたころである。ピアーズとの旅の道中、きりっと朝晩が冷え込む6月のケベック州セントジョヴァイト――「大きな湖＆広大な森を見晴るかす丘の脇にある小屋」――でおもに筆を進めた。「間違いなくこれまでで最高の作品です。かなりシリアスだと思いますが、すてきなしらべ（グッドチューンズ）もありますよ」（6月16日、出版社宛）。なかでも「すべてを投げ捨てて全集中」した終楽章が、本作の焦点をなす。

第1楽章　親友であるスペインの名手アントニオ・ブロサ（1894 ― 1979）のために書かれたからだろう、ほっそりと乾いたヴァイオリンの冒頭テーマは南欧的だ。

第２楽章　毒が注がれる瞬間がある。怪鳥（けちょう）のごときピッコロにのって、地を這うようなテューバが「死の踊り（＝タランテラ）」（15世紀スペイン発祥とも言われる）を奏でだすところだ。それまでの楽想を呼びさますカデンツァ（作曲者が書き記した即興）で第１楽章の冒頭テーマが戻ってくるも、それが遠ざかるとともに……

第３楽章　あのテューバの旋律からひとつの低音主題が浮かび上がる（譜例）。これが地の底に堕ちていくように半音ずつ下行しながら反復され、8つの変奏を展開する。冒頭3音のリズムが「言い難き名＝ピーター・ピアーズ（“Pe-ter Pears”）」の暗号だという説もある（S.A.アレン、2017）。



譜例：第３楽章冒頭トロンボーンの主題。「8音音階による上行」＋「中世のエオリア旋法音階による下行」からなる。こんなに複雑かつ意味深い形姿のテーマもめずらしい。

その真偽はともかく、「パッサカリア」と呼ばれるこの反復形式が“宿命”の表現であるのは確かだ。絶賛したショスタコーヴィチの問題作オペラ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》（1934年）第1殺人シーン後の間奏からの影響も色濃い。第３変奏では、スペイン内戦（1936―39）の死者を弔うようなサラバンド（重い3拍子の舞曲）も聴かれる。ラストでは勝利のニ長調が期待されるものの、独奏ヴァイオリンは激しい吃音（きつおん）とともにニ短調の構成音「F」に固執し、ひとつ上の「G♭」はかよわく漂うのみ。尊敬したマーラー（《第九》）と同じく、ブリテンにとっても楽観的な幕切れなどあり得なかった。

作曲：1938年11月着手、翌年6月完成
初演：1940年3月29日ニューヨーク、アントニオ・ブロサ独奏、ジョン・バルビローリ指揮
使用楽譜：Boosey & Hawkes
編成：フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッドシンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、ハープ、弦5部、独奏ヴァイオリン

交響曲 第1番

ウィリアム・ウォルトン（1902―1983）

第一次世界大戦（1914―18）は芸術の風景を一変させてしまった。ガレキから新世界を再編する運動――ダダイズムやシュルレアリスム――が詩と絵画を染めあげ、爆撃を想起させる騒音が音楽にも闖入（ちんにゅう）しだす。そのショックは50歳を迎えたヴォーン・ウィリアムズの《田園交響曲》にも痕跡を刻んでいるが、廃墟の下で青春をすごした後続世代は、前衛の洗礼をもろに浴びた。

終戦時に16歳だったウォルトンがまさにそう。11歳下のブリテンから「たとえるなら教頭先生のような地位にあった。僕なんか、ちょっと見込みある坊やにすぎない」と尊敬された先輩だ（1937年の日記）。10代にしてオックスフォード大学大聖堂の聖歌隊で指揮者となり、早くから伝統的な合唱に軸足をおいて佳作をたくさん残しているが、正式な音楽教育を受けることはなかった。むしろ若きウォルトンを支援したのは、詩人エディト・シットウェル（1887―1964）を筆頭とする芸術サークルである。彼女の実験的な言葉から生まれた前衛的なオーケストラ組曲《ファサード》（1926）で、ウォルトンの名は一躍高まった。

だが前衛の波はイギリスから急速に引いていく。自分は「流行に取り残されたと自認するブラームスやシベリウスのような作曲家のひとりだ」と後年に語るとおり、ウォルトンは抒情的な映画音楽にも手を染め、半世紀前のエルガーと同じく国家の儀式的な音楽を担うようになる。1948年には結婚して、没するまでイタリアのイスキア島で暮らす――「ここのほうがイギリス風の音楽を書ける。望郷の思いに駆られるからね」。郷愁も、その音楽の根っこにあるのだろう。

さて20代後半のウォルトンは、前述の《ファサード》に次ぐ大規模なオーケストラ作品を切望していた。指揮者ハミルトン・ハーティからの委嘱が追い風となって1932年、初の交響曲に着手し、あくる年の早いうちに最初の2楽章を書きあげる。つづいて緩徐楽章――本作のかなめだ――に進むも、夏ごろに筆が止まる。「ぼくの書いているものなど無価値だ」と。このスランプは、恋愛関係にあったインマ・フォン・デルンベルク男爵夫人にふられたことが原因だとも言われている。第2楽章の「邪気をもって」という珍しい標示は、その痕跡だろうか。

ともかく1934年までに3つの楽章が完成したが、こんどは終楽章が進まない。はじめての映画音楽《逃げちゃ嫌よ》の作曲もあって多忙だったのだろう。焦れた委嘱者に説得されて「3楽章」での初演を敢行（1934年12月3日）。4楽章がまとめて鳴り響いたのは翌年のことである。

第１楽章　オーボエが奏でる５音モティーフを展開していく手法そのものは伝統的だが、これを支える壮大なリズム、後期マーラーをさらに肥大化したような和声法と激しい管楽器の畳みかけには、戦間期のカオスを感じずにはいられない。痩身の前衛芸術家、その姿が浮かぶようだ。

第２楽章　「邪気をもって」踊りまわるスケルツォは、前楽章の変ロ短調からもっとも隔たったホ短調をとる。伝統的にはありえない調選択だ。概して筆の遅いウォルトンにあっては例外的に早く書けた。

第３楽章　初演時には「アンダンテ」ではなく、より深遠な「アダージョ」と表記されていた。前楽章とは対照的に「メランコリーをもって」思いに沈むが、やがて恐ろしい不協和音の爆発にいたる。親友モリソンによれば「シューベルトの弦楽五重奏曲のような緩徐楽章」を書きたかったらしく、感情の大きな振れ幅は、たしかに晩期シューベルトに通じている。なお驚くべきことに、冒頭テーマ（フルート）はもともと第１楽章の素材であったことが、1970年代にウォルトンと研究者のやり取りで明らかになった。

第４楽章　変ロ短調で始まった暗い作品は、ついに変ロ長調で大団円を迎える。聴きどころは、各声部が追いかけあう華麗なフーガ。このフィナーレもたいへんな難産であったが、その甲斐あってと言うべきだろう、ウォルトン畢生（ひっせい）の交響曲は空前の評判をよび、ドイツやアメリカなど海外でも初演されて話題を呼んだ。

作曲：1932年着手、1935年８月完成（大部分はスイスのアスコーナにて）
初演：全楽章は1935年11月６日、ハミルトン・ハーティ指揮
使用楽譜：Oxford University Press
編成：フルート２（ピッコロ持替）、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ２、小太鼓、シンバル、ドラ、弦５部

演奏会のご感想をお寄せください

４月18日 ／ 第438回 定期演奏会のご感想はこちらから→

九州でSymphonyといえば『九州交響楽団』！
福岡で「トヨタ」といえば『福岡トヨタ』！

福岡トヨタ
イメージキャラクター
和田 毅さん

FT
福岡トヨタ

本社／福岡トヨタ自動車株式会社　福岡市中央区渡辺通4丁目8番28号　0120-419-555

ヒカリノユカ
Floor Tile

光除菌
本気で、抗菌と消臭に取り組んだ建材です。
独自の低温高速溶射で、光触媒と抗菌金属を表面に皮膜形成させ、高い抗菌能力と耐久性を持っています。
その抗菌力は４時間で菌数を１万分の１以下（４桁以上）に減少させる能力を持っています。
光触媒は、フジコーが開発した可視光応答型を使用しているので、室内のLED照明などでも反応し、抗菌金属も含有させているので、完全な暗所でも高い抗菌効果を発揮します。

北九州オンリーワン企業
ものづくり技術集団、
安心・快適を 独自の除菌技術で。
FUJICO
フリーダイヤル 0120-80-2450
［販売元］株式会社マスクフジコー
［製造元］株式会社フジコー若松響工場
詳細はこちら
［お問合せ先］株式会社フジコー 福岡県北九州市戸畑区中原西2-18-12 TEL：093・871・3724（代表） FAX：093・884・0048 https://www.kfjc.co.jp